

シンポジウム

「京都の宮廷文化と双京構想の歴史的意義」

- ・平成28年10月8日（土）午後1時30分～3時30分
- ・キャンパスプラザ京都5F第1講義室
- ・主催：双京構想推進検討会議（京都府 京都市 京都商工会議所）

プログラム

①基調講演「京都の宮廷文化と双京構想の歴史的意義」
所功（京都産業大学名誉教授）

②パネルディスカッション「京都の宮廷文化と双京構想の歴史的意義」

パネリスト

- 五島 邦治（京都造形芸術大学教授）
- 坂本 孝志（特定非営利活動法人京都観光文化を考える会・都草 特別顧問）
- 西村 和香（葵祭第61代斎王代（平成28年））
- コーディネーター 所功（京都産業大学名誉教授）



基調講演

京都の宮廷文化と 双京構想の歴史的意義



京都産業大学名誉教授
所功氏

開催概要

京都は、千年以上もの長きにわたり都として栄え、宮中文化が育まれてきました。東京の皇居以外に唯一現役の御所があり、江戸時代にも、御所を中心に宮廷公家社会の文化が継承され、発展を遂げています。

こうした京都の宮廷文化を通して、東京と京都の双方でわが国の都としての機能を果たす「双京構想」の意義について、参加者の皆さんとともに考えるシンポジウムを開催しました。

この冊子は平成28年10月8日（土）に開催しましたシンポジウム「京都の宮廷文化と双京構想の歴史的意義」の採録の概要を、双京構想を理解していただくための参考としてまとめたものです。

時代祭の行列は桓武天皇ご神幸の先触れ

京都の三大祭に数えられる時代祭は、毎年10月22日を中心に開催されます。平安京が造営された延暦年代から幕末維新に至るまで、各時代の面影を偲ぶことのできる衣装をまとった総勢約2千人の行列は、いわば動

く時代絵巻として、国内外の観光客からも大変好評を博しています。しかし、そもそも時代祭はどうして始まり、行列はどんな意味を持っているか、あまりよく知られていないようです。これは今日のテーマに



関係することですから、そのおさらいをしておきたいと思います。

祭儀の日程は、21日に前日祭、22日に神幸行列と行在所祭（あんざいしよさい）と還幸行列が続き、23日に後日祭が行われます。その22日に行われる時代祭は、単なる仮装行列ではありません。

これは平安神宮の大祭の一部分です。そのご祭神は、平安京を造られた桓武天皇と、幕末に京都で生涯を閉じられた孝明天皇です。

午前7時、平安神宮でその二柱のご神霊が御鳳輦に遷されます。ついで9時ごろ京都御所に参ります。それが神幸行列です。

さらに10時半、御苑の建礼門前行在所祭が執り行われます。ここで時代風俗行列と合流して、12時に建礼門前をたち、午後3時ごろ平安神宮に還られます。これが一般に時代祭と称される還幸行列です。

すなわち、桓武天皇と孝明天皇の

御神霊を乗せた御鳳輦は、平安神宮から京都御所へお出ましになり、御所から街中をご巡幸行になって、再び平安神宮へお戻りになるのです。

従って、あの行列で一番重要なのは最後の二基の御鳳輦でして、その前の各時代の風俗行列は先触れとしてお供するものにほかなりません。

明治天皇の叡慮により復興した京都の大札

わが京都は、8世紀の終わり（794年）から1千年以上にわたり名実ともに「ミヤコ」でした。ミヤコとは、天皇の宮殿（ミヤ）のあるところ（コ）という意味であり、日本の首都にほかなりません。

ところが、明治の初め（1769年）、天皇が新政府とともに東京へ遷つてしまわれましたので、京都は急にさびれてしまいました。明治10年（1877年）、そのような京都へお越しになった明治天皇は、大変に心配され、これを何とかしなくてはいけないとお考えになり、翌11年、重要な提案をされます。

その際にヒントを提示したのが、

元老院議員で、西南の役に勅使を仰せつかった柳原前光（さきみつ）です。彼は、明治天皇の側室として後の大正天皇（嘉仁天皇）を生んだ柳原愛子（なるこ）典侍の兄にあたり、早くから外務省に勤め、後にロシア公使なども務めています。

そのロシア帝国では、当時の都はペテルスブルグでしたが、皇帝の即位の戴冠式は古都のモスクワで行われていました。そこで柳原は、明治に入つて首都は東京となったが、皇室儀式の中で極めて大事な即位礼や大嘗祭は京都でなさつたらどうでしょうと進言したようです。それを聞かれた明治天皇は、ロシアを参考

にして、日本でも将来の即位礼や大嘗祭を京都でやれるようにしてほしいと仰せられました。そのお言葉を承つて、関係者がいろいろと検討した結果、明治22年（1889年）制定の「皇室典範」の中に、新天皇の即位礼と大嘗祭は京都において行うことが明文化された。それにより、天皇の御代代わりで一番重要な儀式が再び京都で行われることになり、京都の人々は大いに元氣を取り戻したのです。

その上、数年後の明治27年（1894年）は、平安遷都から1100





神宮として実現したわけです。

しかも、この神宮創建に際し、初めはアトラクションとして行われたのが、先にお話しした各時代の風俗行列、いまに至る時代祭です。

この平安神宮は、1100年前前にできた平安京を偲ぶことができるように、入口の神門は応天門を模し、天皇が重要な儀式をなさった大極殿を少し小さくした形の拜殿が造られ、その東西に青龍樓・白虎樓を建てるなど、実によくできています。

こうして、将来の即位礼と大嘗祭を京都で行うことが決まり、しかも平安遷都1100年の記念諸事業が行われて、京都は往年の活気を取り戻すに至りました。

京都が本来の「ミヤコ」でなくなり、どん底に陥ったとき、先人たちは何とかしなければという気持ちで、いろいろな工夫や努力をされました。そのおかげで、京都の復活から繁栄につながっていった事実を忘

れてはならないと思います。

やがて大正4年（1915年）の御大礼も、昭和3年（1928年）の御大礼も、京都において盛大に執り行われました。その機会に、京都御所も御苑一帯も整備されましたが、それだけでなく、京都駅から北上する烏丸通も市内の敷設も一新されています。

大礼の際には、たとえば、今も京都は内外の観光客が急増してホテル不足だと言われますが、100年前の大正大礼には、ほとんどの皇室・華族をはじめ、政府要人・各界代表から、外国の大使・公使など、夫婦同伴で合計3千人以上も来られました。ですから、宿の手配のみならず、おもてなしをどうするかなど、あらゆる面にわたって大変だったようです。しかし、京都の人々は見事に乗り切ったのです。

大礼に直接関係するものとしては、即位礼の行われる京都御所の紫

宸殿で天皇陛下のお立ちになる高御座（たかみくら）と、皇后陛下のお立ちになる御帳台（みちょうだい）。また、その前面南庭に並ぶ大小の旗や、文武百官のもつ威儀物など、すべて京都の名工が作っています。

京都の「ミヤコ」機能に磨きを掛ける工夫と努力

このように大正と昭和の2回、御大礼が京都で行われたことよって、京都御所は正式に「京都皇宮」と称されるようになりました。「皇宮」というのは天皇のお住まいになる宮殿（ミヤ）ですから、それが東京の皇居だけではなく、京都の御所も天皇のお住まいとしての機能を回復した、それによって京都は再び本来の「ミヤコ」になったのです。

それゆえに、天皇后兩陛下と皇太子同妃殿下が京都へ来られますと、今なお原則として京都御苑内の大宮御所でお泊まりになります。い

まの京都御所も大宮御所も、皇宮の一部となっているからです。

さらに大嘗祭を行う大嘗宮は、かつて上皇のお住まいとしてあった仙洞御所の跡地に、悠紀殿・主基殿・廻立殿などが建てられました。その用材も建築も京都の職人さんが請け負い、立派に仕上げられています。

ところで今日は、「双京構想」の意味を考える場があります。けれど

も、すでに明治以降、天皇が東京（東の都）へお移りになっても、この京都（西の都）は大正・昭和の大礼を行った実績により、都としての機能を取り戻し、その役割を果たし続けてきた、という重要な事実を再認識することから出発してほしいと思います。

前に述べたとおり、明治天皇のご叡慮で御大礼を京都において行うこ

とが決定され、実際に大正・昭和兩天皇の御大礼が京都で行われたことは、京都が今なお「ミヤコ」としての機能を保持しており、さらに充実させていける可能性を確実に持っているという点で、極めて大きな意義があると考えております。

実は、昨年（2015年）大正4年の御大礼から満100年を数えました。そこで私は、これを機会に、

